

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年3月31日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22792270

研究課題名（和文） 施設高齢者の排尿コントロール感を高めるための排尿援助に関する研究

研究課題名（英文） Support for increasing sense of urination control in elderly residents of care facilities

研究代表者

形上 五月（KATAGAMI SATSUKI）

愛媛大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号：40549317

研究成果の概要（和文）：

施設入所高齢者の排尿援助の実態や排尿援助場面での援助者のかかわりを明らかにするために調査を行った。援助者は排尿援助時に高齢者の尿意を確認していたが、高齢者の尿意が排尿誘導に反映されているとはいえなかった。高齢者は尿意の有無に関する反応や誘導への（「同意」・「不同意」）を示すこともあったが、「排尿に関する反応が不明瞭」の反応が約50%と最も多かった。援助者は高齢者の尿意の有無の反応にかかわらず決められた時間に排尿誘導を実施しており、対象者の失禁率は約70%と実施されている排尿援助によって失禁率は改善されていなかった。

研究成果の概要（英文）：

The present study aimed to clarify the state of and Caregivers involvement in urination assistance for elderly residents of care facilities and obtain suggestions for urination care methods at such facilities. Caregivers verbally confirmed residents' desire to void during urination assistance and residents sometimes gave a clear "Yes" or "No" response regarding the desire to void; however, approximately 50% of responses were unclear. Caregivers induced urination at designated times regardless of the elderly residents' responses regarding the desire to void, and overall were not understanding of the residents' desire to void. The incontinence rate among residents was approximately 70% and urination assistance resulted in no improvement in this rate.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：排尿コントロール感、尿意、排尿援助、施設高齢者

## 1. 研究開始当初の背景

高齢者にとって排泄は自尊心に関わる重大な問題である。そのため、看護者は高齢者の排泄ケアにおいて、単に排泄物を処理するだけでなく、できるだけ自立した排泄行動が維持できるよう個々の能力に応じた排泄援助を実施することが重要である。しかし、施設高齢者における尿失禁は高率であるにもかかわらず、介護施設における排泄管理は高齢者の排泄状態が十分に評価されていない現状や、排泄援助方法が援助者の判断によって決定されてしまう現状にあるなどの問題点が指摘されている。これは、介護施設における安易なオムツの使用や多くの高齢者の排泄を効率的に援助するために一斉に排泄誘導が行われるなどのケアが実施されている現状を指摘していると考えられる。このような一律的なケアが行われる背景には、マンパワーの不足があることは否定できないが、それだけではなく、多くの高齢者が尿意を訴えることができないことも原因の一つと考えられる。

排泄援助において、尿意は排尿の可能性を予測する重要な指標であるとともに排尿行動を自らの意思で行うためのサインでもあるが、高齢者施設において尿意を表出しない高齢者が少なくない。多くの施設高齢者が尿意を訴えられなくなる背景には、尿意を訴えなくてもよい状況や訴えにくい状況、すなわち援助方法の問題があるのではないかと推察された。そのため、施設高齢者が自身の尿意に基づいて排尿を行うというコントロール感を維持しながら排尿できる援助方法の確立が重要であると考えた。

先行研究において、定時誘導を受けている尿意の表出が困難であった高齢者に膀胱機能が正常であることを確認したうえで、高齢者の尿意を確認しながら排泄援助を行うことによって、尿意の訴えが回復すること、そして失禁率が軽減するという研究結果を得た。このことから、尿意の表出は援助者の関わり方の影響を受けることが推察された。しかし、どのような対象者が尿意の表出が困難になる危険性があるのか、どのような関わり方（援助者と高齢者の相互作用）があったから尿意の表出が再び可能になったのかについては明らかにするには至っていない。

※ 排泄のコントロール感とは、高齢者が望んでいる結果を達成するために自身が遂行できる能力や排泄行動に対する環境との反応について相互に関連しあった信念や期待を持つこととした。

## 2. 研究の目的

認知症を有する施設入所高齢者の排泄援助の場面における高齢者の反応、援助方法および排泄状態を明らかにする。さらに、排泄援助場面での援助者のかかわりを明らかにすることで施設入所高齢者の排泄のコントロール感を高めるための排泄援助方法を考案するための示唆を得る。

## 3. 研究の方法

(1) 対象施設の選定：申請者が世話人を務める排泄ケア研究会で定期的に開催している勉強会に参加し、排泄ケアに取り組もうとしている施設に協力を依頼した。施設責任者および介護主任に対し研究の説明を行い、同意を得て実施した。

(2) 対象者の選定：介護老人福祉施設入所中でトイレ動作が1人では行えず排泄援助を必要としており、トイレでの座位保持が可能な65歳以上の認知症高齢者を対象とした。対象者の選定は対象者のことをよく理解している介護主任に依頼した。研究の承諾は介護主任および研究者が対象者と家族に文書を用いて説明し同意を得た。さらに、同施設の職員で対象者の排泄援助にかかわる介護職（以下、援助者とする）も対象とした。研究者が職員に対して文書を用いて研究の説明し了承を得た。

(3) 調査内容：排泄誘導時の高齢者の反応、排泄誘導の実施状況（排泄誘導の実施の有無や回数、誘導方法）、高齢者の排泄状態（1回排尿量および失禁量、排尿時刻）、排泄誘導時の援助者の判断や高齢者の反応に対しての思いや感じたこと、対象者の特性として、高齢者は年齢、性別、基礎疾患、入所期間、認知症の程度；NMスケール、援助者は資格の有無や種類について調査した。

(4) 調査方法：排泄誘導時の高齢者の反応、排泄誘導の実施状況は、研究者が1人の対象者に対して3～4日間、午前9時から午後4時までの間、排泄援助の際に行動観察

を行った。観察できた内容はすぐに記録した。排尿誘導時の援助者の判断については観察後に聞き取りを行った。排尿状態は、排尿誘導時に観察した。1回排尿量はユーリンパンで測定し、失禁量はおむつの濡れの量を測定した。尿失禁率は失禁回数/トイレでの排尿回数+失禁回数で算出した。対象者の特性については、NMスケールは研究者が行動観察により評価した。その他の項目についてはカルテからの情報収集を行い記録した。援助者の資格については本人より聴取した。

(5) 分析方法：調査結果から、排尿誘導場面での高齢者の反応の特性について類似性を考慮し分類した。また、対象者ごとに高齢者の反応の特性、誘導の実施状況、排尿状態を集計し分析した。

(6) 倫理的配慮：高齢者と家族、また援助者に対しては文書と口頭で研究に関する説明を行い、同意を得た。愛媛大学研究倫理審査委員会の承認（看 22-08）を受けて実施した。

#### 4. 研究成果

(1) 対象者の特性：対象となった高齢者は8名、平均年齢は88.8(±11.1)歳、NMスケールは平均8.3(±3.7)点であった。援助者は17名で、介護福祉士の有資格者は8名であった。

(2) 高齢者に実施されていた援助方法：対象者8名に実施されていた誘導方法は、観察された60場面のうち、随時誘導が7場面(11.7%)、定時誘導が53場面(88.3%)であった。

(3) 排尿誘導時の高齢者の反応の特性と誘導方法：援助者の問いかけに対する高齢者の反応の特徴を排尿に関する意思表示の仕方によって分類した結果、1)尿意を訴える、うなづくなどの「同意する」、2)尿意はないと訴える、首を横に振るなどの「不同意」、3)尿意があるともないともいえない返答、返答がなく表情の変化からもよみとれないなどの「排尿に関する反応が不明瞭」の3パターンに分類され、「排尿に関する反応が不明瞭」(53.3%)が最も多く、次いで「同意」(31.7%)、「不同意」(15.0%)であった。高齢者は尿意の有無を訴えることもあったが「同意」「不同意」の反応に関わらず定時誘導が実施されていた。

(4) 援助者の判断：決められた時間だから誘導する、次の誘導時間までは待てないなど、18場面(30.0%)で援助者の時間に捉われた認識が影響していた。

(5) 対象者の排尿状態：失禁率は70.6±18.9%、トイレで排尿できた割合は38.5±26.1%であった。

以上のことから、認知症高齢者の排尿誘導は、尿意の確認が困難で反応にかかわらず定時誘導が実施されていた。認知症高齢者の尿意の訴えを尊重した排尿誘導方法の考案が必要であることが示唆された。

#### <今後の課題>

高齢者の排尿のコントロール感を高めるためには、高齢者の尿意を尊重することが援助者に求められる。

しかし、研究フィールドの選定のために、申請者が世話人を務める排泄ケア研究会の定期的開催されている事例検討会に参加した結果、事例検討会に参加した施設のスタッフが排泄に関して問題に感じている事例は、14事例中8例と頻尿が多く、尿意がないことを問題にしている事例は2事例と少なかった。高齢者自身が尿意を訴えられない場合には援助者は尿意を訴えられないことを問題として捉えられていない可能性があった。

今後、施設に入所する認知症高齢者の排尿のコントロール感を高めるためには、高齢者自身が遂行できる能力や排尿行動に対する環境（特に傍でケアする援助者などの人的環境）の存在は必要不可欠であるため、高齢者の尿意を尊重することや高齢者の排尿援助にかかわる援助者がその現象をどのように捉えているのか明らかにし、そのように捉える背景や対応策についてさらなる検討が必要であることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①形上五月、陶山啓子、小岡亜希子、藤井晶子：尿意を訴えない介護老人保健施設入所者に対する尿意確認に基づく排尿援助の効果、日本老年看護学会誌、査読有、Vol. 15、No. 1、2011、pp13-20

[学会発表] (計3件)

①藤井晶子、形上五月、小岡亜希子、陶山啓

子：施設入所高齢者の尿意の訴えと膀胱機能が排尿状態に及ぼす影響、日本老年看護学会、2010年11月7日、前橋市

②大木利枝、形上五月、陶山啓子：回復期リハビリテーション病棟入院中の患者の夜間頻尿の実態と原因に関する研究、第37回日本看護研究学会、2011/8/7-8、横浜市

③陶山啓子、窪田里美、山木一恵、形上五月他：えひめ排泄ケア研究会の活動と課題、第24回日本老年泌尿器科学会、2011/5/28-29、名古屋

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

形上 五月 (KATAGAMI SATSUKI)  
愛媛大学・大学院医学系研究科・助教  
研究者番号：40549317